

ええやん! かんさい

# 外国ルーツ生徒 広がる門

関西国際大が2024年度入試から導入した「外国ルーツ生徒特別型」選抜を利用し、この春から2人が同大学で学んでいる。日本語で出題される一般入試では十分に力を発揮できない可能性がある受験生を、書類や面接で選抜する仕組みだ。同様の入試は他大学でも試みられ、多様な個性を尊重し、誰もが能力を発揮できる公正な環境を意味するDEI (Diversity, Equity, Inclusion) の実践例としても注目される。

(新井清美)

多様な人材活躍へ特別入試

## 奨学金も用意

「いい仕事に就くために大学に行きたかった。経営に興味があり、ぴったりの入試があった関西国際を選んだ」。同大学経営学部1年のシブ・ガウタムさん(22)は笑顔で話す。

ネパール生まれ。14歳の時に日本で働く父親のもとに家族で移り住み、17年春に兵庫県伊丹市の中学校に入学した。勉強が好きでなく、母国では学校に行かない日も多かったが、別室で授業を受けて日本語を身に付けるうちに意欲がわき、「日本でチャレンジしよう」と、4年制の定時制高校に進んだ。

母国語と英語に加え、日本語も話せるようになったが、日本語で大学を受験するのはまだ難しい。海外への進学を考えていたところ、同大学の「外国ルーツ生徒特別型」選抜を知った。

この選抜は、両親または片方の親が外国籍で、日本に住む受

験生が対象。学費負担を軽減するための奨学金も用意されている。日本語の筆記試験はなく、面接と、志望理由書や高校の調査書で合否が判定される。

ガウタムさんは現在、留学生向けの日本語の授業を受けつつ、経営学やマーケティングなどを学ぶ。「聞いたことのない単語が多いが、顧客と店の関係や売り上げの管理など、とても面白い。将来は自分でビジネスがしたい」と話す。

## 浸透に時間

同様の入試は、各大学が導入し始めている。奨学金の有無などに差があるが、24年度からは大阪経済法科大(大阪府八尾市)が、流通科学大(神戸市)も25年度から実施している。

18歳人口が減る中で新たな受験者層を呼び込める上、多様な学生を集められるメリットがあり、関西国際大の芦沢真五副学長は「日本の学校に通った一方、



Gekkan Daigaku

紹介するのは

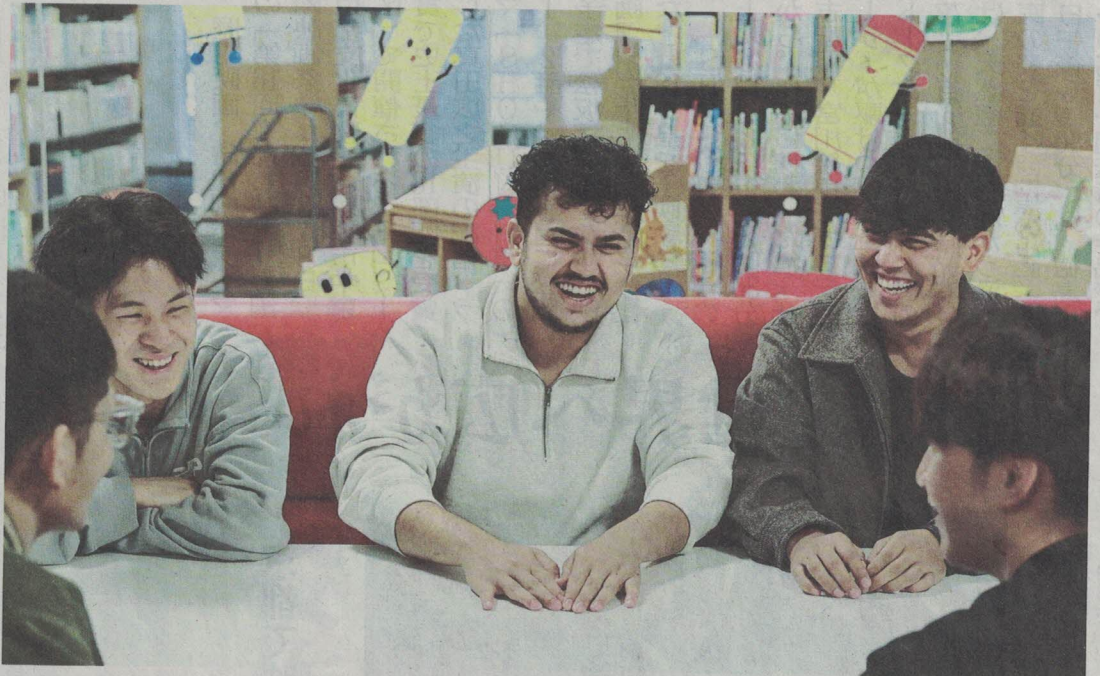
関西国際大

読売新聞  
オンライン  
こちら→



# 門戸

友人らと談笑するシブ・ガウタムさん  
 (中央) (5日、兵庫県尼崎市の関西国際大尼崎キャンパスで) 近藤誠撮影



外国の文化や言語についての経験を持っている。様々な背景の人を受け入れるインクルーシブな社会を目指す中で、大学として実践するべきだと考えた」と語る。

ただし、導入初年度に利用した入学者は2人。約20人の定員には届かなかった。芦沢副学長は「最初から大学進学を選択肢に考えていない外国籍の子どもも多い。問題提起の意味もあって実施しており、浸透に時間がかかると実感したが、じっくり取り組みたい」と話す。

## 進学率低く

海外からの人材受け入れが広がり、外国にルーツを持つ生徒が増加する一方、進学率の低さは社会的な課題として指摘されている。

文部科学省の調査(23年5月1日現在)によると、日本語指導が必要な高校生の大学などへの進学率は46.6%で、全高校生(75.0%)に比べて低い。大阪府立長吉高(大阪市平野区)で外国ルーツの生徒らの進路指導を担当する教員リー・タイ・ワーさん(35)は「日本語以外の言語を持つ生徒は、様々な場で活躍できる。彼らの進路がもっと

広がってほしい」と話す。

進学率が低い背景には、言語の問題だけでなく、経済的な理由や、大学進学のためのロールモデル(手本となる人)が少ないといった事情もあるとされる。リーさんは「新しい入試の方法で大学進学希望者が増えることを期待するが、奨学金など経済的に持続可能な仕組みも重要だ」と指摘する。



大阪府立長吉高で母国文化について学ぶ中国出身の生徒ら(大阪市平野区で)